

第8回(2009. 2. 1 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「2月は節分」

2月3日は「節分」である。そもそも節分とは季節の変わり目のことをいう。本来は「二十四節気」の立春、立夏、立秋、立冬のそれぞれの前日を節分といったが、立春の前日の節分だけが現在に残っている。たぶん、旧暦の2月は旧年と新年との分岐点だったことからかもしれない。

「二十四節気」の「節気」とは、地球上から見ると太陽の方が天球上を回っているように見えるため、古代中国では天球上の太陽の通り道(黄道)を24等分して、それぞれ次のように名称を付けて季節を表したものである。

(春):立春、雨水、啓蟄、春分、清明、穀雨 (夏):立夏、小満、芒種、夏至、小暑、大暑

(秋):立秋、処暑、白露、秋分、寒露、降霜 (冬):立冬、小雪、大雪、冬至、小寒、大寒

これらの名称は、旧暦を使っていた時代に付けられたものだから、立春といってもまだ寒い2月のことである。なお、「二十四節気」の「気」は、「陰陽道五行説」の「気」からきている。季節の「季」を書く人がいるが、「節季」とは年の暮れをいうので間違いである。「気」をつけよう。

陰陽道五行説は古代中国の易学からきている。「陰陽道」の基本的な考えは、万物は陰と陽に分かれ、それぞれが関連しあっているいろいろな現象を起こしているという考えで、詳細は別の機会に譲るが、自然や人間社会など万物の生成・消滅などの現象は、すべて「五つの気」が循環することによって変化するという考えが五行説である。五行の五つの気とは、木、火、土、金、水の五つの植物や鉱物をいう。「行」とは巡るという意味があるようだが、この五行と陰陽道の陰陽と組み合わせで「陰陽道五行説」という。

節分のこの日は、イワシの頭を焼いて柊(ひいらぎ)の枝に刺し、戸口に掲げておくという風習もあるが、柊の葉のトゲとイワシを焼いた臭気が邪気を払うといわれていた。イワシの代わりにニンニクなどを焼いて小枝に刺すところもある。この日の夜、豆をまいて「鬼は外、福は内」と大声で叫ぶのが、昔から一家の主人や長男の役割だった。豆をまいた後、家族が自分の年齢だけ豆を食べると邪気が払われるといわれている。豆は「魔の目」に通じる。古来わが国では、鬼とは魔物であり、眼を射ることで鬼すなわち魔物や邪気を払うことからきている。したがって、この豆は必ず煎った豆を使う。生のままでは芽(目)が出てしまうからだ。まあこじつけだ。

節分で撒いた豆を歳の数だけ食べるのは、この日が新年の年がわりの行事でもあったからだが、豆そのものは古代中国でも邪気を払うものとされていたようである。この残った豆を保存しておき、雷が鳴ると、蚊帳の中に入ってその豆を食べる。ご老人や病気の人は仕方がないが、さばをよんで年齢をごまかし、実年齢より少ない豆の数を食べる人もいるが、天はお見通しだ。神事は厳粛なものである。こんなところで見栄をはってどうする。

豆まきの際に、「鬼は外、福は内」と叫ぶが、「鬼は外」といわない神社仏閣もある。著名なところでは、鬼を御神体としている「鬼子母神」や、成田山新勝寺のように、御神体の不動明王の慈悲によって鬼を追い払わない、というところもある。

ちなみに、不動尊(不動明王)といえば、東京でも有名な深川不動は、正式には成田山新勝寺の別院である。江戸初期に不動尊信仰が盛んになり、成田まで参詣するのが大変だった時代だったから、元禄 16 年(1703)深川八幡の別当(神仏習合で神社に併設された寺)の永代寺において、成田山新勝寺の不動明王の出張御開帳があった。それが発端である。なぜ不動尊信仰が盛んになったかといえば、江戸時代歌舞伎の市川団十郎の人气が高かった。この団十郎の屋号が成田屋という。そこから成田山詣でが流行し、成田山の御神体である不動明王信仰につながったという、じつに変な理由だったらしいが、不動明王が恐ろしい容姿をしているのは、救い難い者でも力づくで救ってやるという決意の表れだという。

また、鬼子母神という女神には 500 人もの子供がいたが、この子供たちを養うために、人間の子供をさらってきて食べさせていた。人間たちはお釈迦様に助けてくれるようお願いすると、お釈迦様は一計を案じ、鬼子母神が最も愛していた子どもを隠してしまう。鬼子母神は子供が足りないことに気づき、あわてて探すのだが、いくら探してもみつからない。嘆き悲しんだ鬼子母神は、お釈迦様に相談した。お釈迦様は、500 人もの子供の中のたった一人でもいなくなればこのように嘆き悲しむ。たった数人しかいない子供をさらわれた人間の悲しみはいかばかりであるか、いまのお前にはよくわかるに違いない、と命の大切さを教えた。鬼子母神は改心して鬼ではなく子供の守り神になった。だから現在では鬼子母神の「鬼」の文字には「角」がない。つまり漢字の上の部分「𠂔」がなく「田」になっている。「当用漢字にはないからどうしてくれる」といっても仕方がない。神佛の世界のことだ。

わが国では、中国の影響などから、古くより陰陽道が盛んで、方位には特別の意味があった。子(ね)は北、卯(う)は東、午(うま)は南、酉(とり)は西というように、方角を十二支で表していたが、特に北東の方角は「鬼門」といって鬼が住むところとされており、昔の人たちは「方位除け」、「鬼門除け」などと称して、この方角に神仏を祀った。徳川家康は江戸城を築くにあたり、平安時代の悲劇の武将「平将門」を祀った神田明神を、江戸城正門である大手町から鬼門の方角である現在の場所に移したのも、「将門」の怨霊によって江戸を守るためだった。また、鬼門の方角に当たる上野に寛永寺を、裏鬼門に当たる南西の方角に芝の増上寺を建立したのも、陰陽道からきた「鬼門除け」である。ちなみに、江戸幕府 15 人の将軍のうち、それぞれの寺に歴代の将軍 6 人ずつを埋葬して江戸城の守りとした。なお NHK 大河ドラマの「篤姫」は、夫の第 14 代将軍「家定」とともに寛永寺に葬られている。

ところで、豆まきやおとぎ話に出てくる鬼の多くは、角を生やし、虎模様のパンツをはいているが、それには深い意味がある。鬼門すなわち北東の方角とは、十二支でいえば丑寅(うしとら)の方角である。だから、鬼は牛の角を生やし、虎模様のパンツをはいている。では、鬼門の反対は南西だが、十二支では未申(ひつじさる)の方角である。『古事記』にも、桃の実が悪霊を祓うものとされているように、古くから未申の方角に桃の木を植えて「鬼門除け」とする風習があった。おとぎ話では、桃太郎はサル、トリ(雉)、イヌをつれて鬼退治をした。この話の作者は、未(み)を桃の実(桃太郎)に置き換えて、未の次ぎは順番として申(さる)、酉(とり)、戌(いぬ)と続くから、桃太郎のお供にさせたのである。たかがおとぎ話だ、とバカにしてはいけない。どこかの国の妙な教科書よりはずっと為になる。杓子定規な教師に教わるよりも、おとぎ話を読んでいた方が将来的に役に立つかもしれない。そういった意味からも、大人も子供も雲竹斎先生の講義をよく聴くのがよろしい。